標津郡

1 武佐川（ムサ、ペット）他人の頭を撫る義
　或は曰くムセ（いらくさ多き川）の義ならんと。
2 伊茶仁（イチャニ）鮭鱒の產卵する處の義

目梨郡

1 忠類川（チウ、ルイ、ペット）流れ急なる川の義
　チウは「流れ」。ルイは「急激なる」義なり。
2 瑠邊斯（ル、ペッシ、ペ）路下る處（越路）の義
3 薫別（クンネペット）黑川の義
　クンネは「黑き」。水が濁りて居る故に名く。

4 崎無異（サク、モイ）夏の灣の義
　サクは「夏」。モイは「灣」。夏時鱒漁をなす故に名く。
5 植別（エン、ペット）惡しき川の義
　昔時此川邊に惡疫が流行したる事あるよりかく名く。
6 春葛古潭（シュムカルコタン）油取る所の義
　シュム（又はスム）は「油」。カルは「取る」義なり。
7 羅牛（ラ、ウン）低き所の義

千島國

色丹郡

1 水晶島（シ、イショ）大磯の義

2 勇留島（一名、高島）（イルル）人を見送る義
3 志發島（シベオッ）鮭多しの義
4 多樂島（タラ、ウク）背負道具を受取る義

國後郡

1 蟹向崎（ケヲ、モイ）美はしき灣の義
　ケラは「味の甘き」義なれば、此處にては「美しき事」を意味するならん。
2 泊（トマリ）港の義
3 乘戸崎（ノッエプ）岬の如く突出せる義
4 米登賀（ペット、カ）河の上の義
5 東沸（トー、プッ）沼口の義
6 小田富（オタ、トム）砂輝る義
7 乳刈別（チプ、カル、ペット）舟を取る川の義
　チップは「舟」。英語の Ship と似たるは奇ならずや。カルは取るの義なり。
8 茶々嶽（チャチャ）老人の義
9 跡彌岬（アッイ、ヤ）大洋に臨める陸の義
　アッイは「太洋」。ヤは「海に對する陸」の義なり。
10 縷緯岬（ルル、イ）鹹水のある所の義

擇捉郡

1 呂幸灣（ロコム）海豚の義
2 田根萠（タンネ、モイ）長き灣の義
3 萠淵灣（モイ、ケッ）灣の端の義
4 内保（ナイ、ポ）小さき川の義

ポは「小さき」義にして名詞の後に助字的に附する語なり。

5 跡狹（アットサ）豐かなる平地の義

振別郡

1 單冠山（ヒトカップ）葡萄の生へたる所の義

2 老門（オイト）水溜りの義

紗那郡

1 留別（ル、ペット）路のある川の義

2 有萠（アリ、モイ）完全なる灣の義

3 別飛（ペット、プツ）川口の義

蘂取郡

1 乙今牛（オトイマ、ウシ）遠くにある所の義

2 藻寄灣（モ、イオロ）靜かな波の處の義

3 戸知（トシリ）海岸の下部の義

得撫郡

1 床潭灣（トウ、コタン）沼のある所の義

2 小舟（和名）英語のBoat（小舟）を譯したるものなり

小港にして、小舟のみの碇泊に適せるより名く。

3 知理保以島（チリ、ポイ）鳥が少なしと言ふ義

4 武魯頓島（英國の船長の姓より起りたる名稱なり）

新知郡

1 **霜知島**（シ、モシリ）大なる土地の義

シは「大」。モシリは「土地」又は「國」の義なり。

占守郡

1 **加林古潭島**（カリン、コタン）山櫻のある所の義

2 **溫禰島**（オンネ、コタン）大なる土地の義

3 **幌莚島**（ポロ、モシリ）廣き島の義

4 **久里留海峽**（クリレッ）露西亞語にて「海島」を意味す

バチェラー氏曰く、色丹島在住のクリル、アイヌは今も冬は穴居す。即ちコロポクウン、グルとも謂ふべく、其居はイセイ、コットに外ならず。彼等言ふ「我が先祖はサガレーンより來れり」と。サガレーンにも穴居アイヌあり。實にやサガレーンにては穴居の人を今も現にトイ（穴の）、チセイ（家）、コッチャ（持つ）、グル（人）と呼べり。

按ずるに、コロポクル人種とはアイヌの一種屬にして、普通のアイヌとは身體矮小なりし者ならん。普通の蒙古人と其一派たるラプランド人とを比較參照すべし。

附錄

(一)アイヌの風俗及び傳說
(二)アイヌの人口別
(三)アイヌ語と日本語の比較
(四)地名に最も多く現はるゝ語の解釋
(五)本土の地名考

(一)アイヌの風俗及び傳說

左記の傳說は、多くはバチェラー氏の「アイヌと其傳說」中より拔抄して覺書的に書し置きたるな、其儘に寫したるものなれば、或は簡短に過ぐるやも知れざれども、讀者の御判讀を得れば幸甚。

(1)アイヌ人種は、太古、九州、本土及び北海道の各地に住居したり、但し琉球には住居せざりし事は、少しも其傳說なき事に依て、之を證し得べし。

(2)古事記に、土蜘蛛とあるは、即ちアイヌ人種の事なり。

(3)アイヌの傳說に依れば、昔時は非常に人口多かりしが、日本人との戰爭、及びアイヌ同志の戰爭のため、著じるしく、人口を減少したり。目下全道の人口は約二萬人なり。

(4)傳說によれば、アイヌの祖先は肉食人種なり、アイオイナ神(耶蘇敎のゴッドと同じ樣なもの)來りて、魚肉や獸肉を食ふ事を敎へたりと。

(5)コロボックルはエスキモウと同一人種なるべし。身體の矮小なりし事、竪穴に住した

る事、獸皮を着る事等が之を證明す。

(6)醫師の言に依れば「アイヌは人種として既に老朽したる人種なり」と、加ふるに、生存競爭と不衞生と、親族結婚とは彼等の人口を年々に減少せしめつゝあり。

(7)天地創造說。「水陸が混沌たる時、天神が一羽の鶺鴒を下だして、世界の設備を命じ玉へり。鶺鴒は水上に兩翼を延ばして、羽搏せしに、泥土は陸と成り、水は海と成りたり、故に鶺鴒は貴とき鳥なり。」

(8)滿潮と干潮の理由。「海中に巨魚あり、口を開いて水を呑む時は、干潮となり、水を吐く時は滿潮となる」。

地震の原因も亦此巨魚の運動に基づくと言ふ。

(9)極樂をカムイ、モシリ(神の國)と稱し、靈魂不滅說にして、此浮世の下に、六個の地獄ありと信ず。彼等は此世界を(浮べる土地)と言ふ。

(10)日は女神にして月は男神なり。

(11)蝦夷地に蟲の多き理由。「一眼の怪物あつて、大に人間を惱ませり。一人の豪傑あり、矢を以て、其一眼に當て、之を殺して、其死骸を燒き棄てたるが其灰燼より幾百千萬の蟲が飛び出だせり」。蟲は惡むべきものなれども、かの一眼の怪物に比すれば、あきらめが附くと言ふべきなり。

(12)神が人間を造り給ひし時、土を以て體を作り、ハコベ(草)を以て毛を作り、柳の枝を以て脊骨を作りたり、故に人間は老人に成ると、腰が屈むなり。

(13)神が人間を作りし後、鶺鴒(情慾の鳥と稱す)を遣はして男女交合の道を敎へしめたりと。

(14)人間の脊骨は柳の木にて造られたれば、柳は神聖なる木なり。故に小供が產るれば柳を削りてイナオ(削りかけ)を造る。病氣の時にもイサホを造りて呪を爲す。

(15)イナオの多く集合したる物を幣と稱す。イナオは重に、柳及びニワトコの木を用ふ。

(16)「髭あげ篦」をキケ、ウシ、バスィ(削りかけのある箸)と言ふ。飲食物に髭が入ることは

神に對し、又人に對して失禮なれば、かく爲るなりと言ふ。

(17)男女に拘はらず、赤子の股の肉の厚き處を切取る習慣あり。これは生長の後、股擦を防ぐためなりと言ふ。猶太人の割禮を參照すべし。

(18)アッシ(布)はオヒョウの木の皮を剝ぎ、十日間水に浸したる後、之を日光に曝し細かく裂きて、玉卷とし、これにて編みたる布なり。

(19)シントコ(漆器)とは凡て「綺麗なる物」の義なり。トムベ(刀劍)とは凡て「光りある物」の義なり。イコロとは寶物の義なり。刀劍は箱に納れ梁上に上げて、他人に見せる事を嫌ふ。

(20)アイヌの女が文身を爲す方法。

先づアヲダモの木の皮を取り、水に浸して沸る。又別に白樺の皮を取り、鍋の下に燃やして、鍋底に油煙を作る。さて小刀にて肌に傷をつけ、鍋墨を傷に塗り、アヲダモの沸た汁を布にて浸し附くるなり。(近來は法律が之を禁制するが故に、此風習は行なはれず)

(21)アイヌの女が文身を爲す理由

婦人には惡しき血多きゆへ、文身をして、血を出し、女の身體を强壯にする爲めなりと言ふ。然らば何故に口と手にのみ文身するかと言へば、口と手が一番に人目に附き易き所にして、惡魔なぞ來つて女に取り附かんとする時、文身して居る所を見れば驚いて逃げると言ふ利益あればなりと。

(22)蛙の脊中に文身の如き紋形の在る理由。

昔、女ありけり。親には不孝、夫には不貞なりしかば、神怒り給ひて、此女を化して蛙に成しなり。而して蛙の子孫は汚なき所にのみ住し、人に見られては殺さるゝ運命を持つ事になれり。蛙に文身形の紋あるは其前身が女なりしが故なりと。

(23)男女とも、頭髮を斬ることを嫌ふ理由は、神の造り給へる本來の美形を損ずれば神の怒を蒙むればなりと。

(24)妻は夫の名を呼ばず。名を呼ぶは夫に對して無禮なりと思ふ。夫を呼ぶには只「お父(とう)つあん」と言ふ。

(25)夫が妻を呼ぶ時には名前を呼ぶ。偶々(たまゝ)マチ(妻)と言ふ事もあり。最も愛して呼ぶ時にはカルキトマ(我が喜こび)と言ふ。第三人稱にして言ふ時にはクグロ、シネンラプ(足の遲き者)或はエン、ウサラゲタ、アングル(下座に座る人)と言ふ。

(26)婦人に其夫の名前を問ふに、只赤面して、何とも答へざるは、夫の名を呼ぶことが無禮なるを以てなり。女は其夫を三人稱にて呼ぶ時は、クゴロ、グル(此方の人)或はエンヘコテ、グル(支配する人)或はエンロロ、ゲタ、アン、グル(上座に坐る人)と言ふ。

(27)產婦が產褥にあるは、六日間にして、七日目の朝になれば、自から起きて、河又は泉より水を汲みて、身體を拭ひ潔め、尙、水を携へて、食物の調理に從事す。かくせざる內は、部落の人と交際するを得ざるなり。

(28)酒が日本人によつて、輸入せらるゝ以前には、粟を以て之を造りたり。今も尙、此種の酒を造る。

(29)オキクルミ(義經公)を尊敬する部落と、之を罵詈する部落とあり。多分義經を味方とせる部落と之を敵方にせる部落とに依つて、此區別を生ぜしものならん。次の甲乙兩說を見よ(序に曰く、辨慶をサマイグルと名く。)

甲說
- (イ)アイヌを文明に導きたり。
- (ロ)老人を敬ふことを敎へたり。
- (ハ)義經公は半神半人なり。
- (ニ)義經公はアイヌの祖先なり。

乙說
- (イ)或る酋長の婿となり財寶を盜みたり。
- (ロ)毒蛇は義經の作りしものなり。
- (ハ)多くの惡事を爲せり。
- (ニ)後、樺太に渡りて土人に殺されたり。

(30)日高國、平取村に義經の祠ありて、土人之れにイナオを捧げて、敬意を表しつゝあり。

(二)アイヌの人口別

支廳、區別	戸數	男	女	計
1 札幌支廳	二五二	五一二	五〇七	一〇一九
2 空知支廳	六一	九二	一〇〇	一九二
3 上川支廳	六二	八一	九一	一七二
4 後志支廳	一三二	二四三	二五八	五〇一
5 檜山支廳	四一	九八	八二	一八〇
6 函館支廳	九五	二三九	二三一	四七〇
7 室蘭支廳	七八七	一八三四	一八七八	三七一二
8 浦河支廳	一五六六	三二二七	三五六七	六七九四
9 河西支廳	四八九	八三五	八二八	一六六三
10 釧路支廳	四一一	八〇二	八八〇	一六八二
11 根室支廳	二一〇	四八一	四九一	九七二
12 網走支廳	二〇六	三一〇	三七七	六八七
13 宗谷支廳	七一	一二二	一〇九	二三一
14 留萌支廳	三二	五六	七三	一二九
15 札幌區	○	○	○	○
16 函館區	○	○	○	○
17 小樽區	一	○	○	○
18 旭川區	四九	一一一	一五三	二六五
總計	四四六五	九〇四四	九六二六	一八六七〇

右の表は北海道廳にて、最近に調査したる人口統計なり(大正四年度)

(三)アイヌ語と日本語との比較

日本語とアイヌ語と、發音の全く同じきもの、若しくは、發音の類似せるもの多かり。併し何方が元なるかは劇かに明言し難し。次に列擧せるものゝ中、確かに日本語がアイヌ語に轉用せられたりと思はるゝものには特に(日)を附記せり。

日本語	アイヌ語	日本語	アイヌ語
1 礒(海岸の岩)	イソ	2 岩	イワ
3 鉢	バチ	4 馬	ウマ
5 牛(東北音にて)	ペコ(或はベコ)	6 口	クチ(喉の義)
7 手	テ(或はテク)	8 酒	サケ
9 小刀	マキリ	10 神	カムイ
11 水(閼伽)	ワッカ	12 茶	チャ(日)
13 錠	ショウ(日)	14 馬鈴薯	エモ
15 上	カン	16 鉈	カンナ(日)
17 駕	カンゴ(日)	18 金(鐵)	カネ(或はカキ)
19 櫂	カンチ(日)	20 金槌	カニツチ(日)
21 手拭	ハチマキ(日)	22 痳疹	ハシカ

23 鷹	タカ	24 骨	ポネ
25 小豆	アンツキ	26 猫	メコ
27 命	イノディ	28 色	イロホ
29 祝	イワイ	30 昆布	コンブ
31 笠(傘)	カサ	32 母	ハボ
33 上リ(山)	ヌプリ	34 風俗	プリ
35 幣	ヌサ	36 郭公	カコック
37 量る	バカル	38 鐵瓶	カマ(日)
39 箸	ハスィ	40 大庖丁	ナタ
41 猿	サロ(日)	42 雷鳴	カンナ
43 鹽	シポ	44 粉	コ
45 受く	ウク	46 伺候	マイレ(日)

47 童(東北音)　ワッパ
48 蠢めく　モヨモヨ
49 童　ワッパ
50 馬鹿　バカ(日)
51 藥(溫泉)　クスリ
52 蟋蟀　バタ
53 苫　トマ
54 やい(呼ぶ聲)　ヤイ
55 橇　ソリ
56 艾　ヤイト
57 珠　タマ
58 棚　ヅナ
59 列(數へ方)　ツラ
60 愛女　メノコ(女)
61 野地(沼地)　ヤチ
62 銛　ヤス
63 刈り取る　カル
64 富士山　フヂ(火)
65 野　ヌップ
66 下る　サン

右の外に音としては日本語に類似して居れども、意味が全く異なりて可笑しく思はるゝ者三四を擧ぐれば左の如し。

1 此畜生奴　ワタシ
2 水のある谷　ワカランナイ
3 全く　ヤイネヤイネ
4 注意する　ワイラマテ

英語と發音及び意味が兩つながら同じ樣なるものを擧ぐれば左の如し。

1 two　ドウ
2 challenge　チャランゲ
3 matoh(wife)妻　マチ
4 ship　チップ
5 bone　骨　ボネ

(四)地名に最も多く現はるゝ語の解釋

次の語原を記憶すれば、大概のアイヌ語の地名を推察し得る便利あり。試に東北地方の地名を取つて考一考せよ。興味津々として湧出するを覺えん。

1 ペット(河)　例へば　江別　士別
2 ナイ(河又は澤)　幌內　岩內
3 サット(乾きたる)　札幌　札內

4 ポロ(廣き)　幌別(ほろべつ)　幌向(ほろむい)
5 コタン(村、所)　積丹(しやこたん)　神居古潭(かむこたん)
6 ウシ(場所)　妹背牛(もせうし)　伊香牛(いかうし)
7 シリ(土地)　利尻(りしり)　國後(くなしり)
8 ユウ(溫泉)　夕張(ゆふばり)　由仁(ゆに)
9 ソウ(又はソ)(瀧)　壯別(さうべつ)　空知(そらち)
10 ペ(濁水)　留萌(るもつぺ)　乙部(おとべ)
11 ワッカ(水)　稚內(わつかない)　止稚(やむわつか)
12 オタ(又はウタ)(砂)　小樽(おたる)　歌棄(うたすつ)
13 シ(大)　士別(しべつ)　支笏(しこつ)
14 ポン(小)　本別(ほんべつ)　小留萌(はんるもつぺ)
15 ピラ(崖)　平岸(ひらけし)　平賀(ひらか)

16 モイ(灣)　蝦向(けらもい)　崎無畏(さきもぬ)
17 モ(又はモウ)(小さき)　藻岩(もいは)　望來(もうらい)
18 モ(又はモン)(緩やかなる)　茂別(もべつ)　紋別(もんべつ)
19 ト(又はトウ)(沼又は湖)　常呂(ところ)　床谷(とうこたん)
20 オンネ(大又は老)　恩禰內(おんねない)　恩別(おんべつ)
21 オ(川尻)　長知內(をさつない)　雄冬(をふい)
22 モシリ(島)　蝦夷島(えぞもし)　幌筵島(ほろえんもし)
23 エン(惡しき)　遠別(えんべつ)　植子谷(うえこたん)
24 マイ(又はオマリ)(所)　幣舞(ぬさまひ)　苫小牧(とまこまい)
25 サラ(又はサロ)(茅)　佐良川(さら)　沙流(さる)

(五)本土の地名考

本土の國名並に地名にして、アイヌ語より轉訛したる者と思はるゝもの甚だ多し。殊に東北地方の地名は十中の八九まで、アイヌ語に起原せりと斷言しても憚りなかるべし。
左に思ひ當りたる儘を列擧して大方諸彦の御參考に供することゝせん。

一、畿内。

1 大阪(オ、サッカイ)川尻に砂が乾ける所の義

2 多武峯(タブ)圓頂丘の義

多武峯(タブ、ミネ)は重複したる名稱なり。

3 堺(サッカイ)砂が乾ける所の義

二、山陰道。

1 出雲(エッ、ムイ)傾斜せる所(海岸が)の義

三、山陽道。(全部不明)

四、南海道。

1 紀伊(キイ)突出せる所の義

2 伊豫(イヨ)充てる(即ち豐饒なる)義

3 高知(コチ)足跡(細路)の義

五、西海道。

1 筑前、筑後(筑紫より起原す)

チクシは「路」の義。道路が四通八達せるより名く。故に路とは「交通便利」の意。

2 薩摩(サットマ)乾きたる半島の義

3 對島(ツイマ)遙かなる義

4 阿蘇(アソイェ)穴を穿つ義

5 宇佐(ウサ)種々ある義。(獲物の豐かなるを意味す)。

六。北陸道。

1 若狹(ワカ、サン)水下流する義
　地形が日本海に向つて、勾配急にして、流水が直下するより名付く。
2 越前、越中、越後(越の國)
　「越の國」の越はクシにして「越る」又は「渡る」の義より轉訛したるものならん。
3 能登(ノット)顎又は岬の義
4 佐渡(サット)乾きたる土地の義
　札幌の札を參照すべし。

七、東海道。

1 志摩(シュマ)石の義
2 尾張(オハル)澄みたる汁の義
3 駿河(スルグ)鳥冠草の毒(狩獵に關したる語)
4 富士(フチ)天然の火の義
5 フチはアムベ(人造の火)に對したる語なり。
6 甲斐(カイェ)破壞する義
　富士山の噴火に關係ある義ならん。
7 伊豆(エッ)突出したる義
　土瓶の口や取手の如くに長く突き出でたる形を言ふ。
8 相模(次項、武藏の條に記せるが如く、古きアイヌ語より出でしものならん)
9 扇谷(ヤッ)(ヤッはヤチの轉なり)
　ヤチ即ち野地にして、沼澤の義なり。
10 武藏。
　吉田博士の大日本地名辭書に曰く「惟うに、東方は夷種の古國也。謂ゆるムサシの如きも古夷語に出づる無からんや」。
11 江戸(エンド、コタシ)みそはき草の茂れる所の義

12 麻布(アサブ)橈にて漕ぐ義
　沼地にして、小舟を行りし故ならん。
13 秩父(チチップ)痛む又はうづく義
　緩流、清冽にして、手足がうづく様なるより名けたるならん。
14 安房(アワ)輝やける又は華やかなる義
　太平洋に突出して、晴々しければならん。
15 上總、下總(フッサ)強く吹く義
　太平洋方面より大風が吹き付けるより名けしものか。
16 犬吠崎(イヌボエ)平原の突出せる義
17 利根川(トネ)湖水の如き義
　筑波(ツクバ)突出して居る義

八、東山道。

1 信濃(シナイ、ヌ)大河の邊なる野の義
2 淺間(アサマ)基礎の義
3 上野、下野(ケヌ)平野の義
　ケは「平野」の義。ヌも「野」の義なり。
4 栃木(トチ、ニ)栃木の義
5 鬼怒川(キヌップ)茅の原の義
6 羽前、羽後(ウ)廣き所の義
　ウはウシケと同じく「廣茫なる土地」を意味す。
7 陸前、陸中、陸奥(ムト)刀を帶ぶる義
8 岩代(イワ、シリ)岩の陸地の義
9 磐城(イワケ)岩のある所の義
10 庄内(ソウ、ナイ)瀧の川の義

11 院內（エン、ナイ）惡しき川の義
12 平泉（ビラ、エツ、ムイ）崖が突出せる義
13 一ノ戸、二ノ戸、三ノ戸等（ヘ）向ふ義
「向つて」とは敵に向つて門關の備へを爲す義ならん。
14 淺蟲（アサムサクイ）底が無い義
15 青森（アオ、モリ）突出せる丘の義
16 津輕（ツカラ）海豹（あざらし）の義
17 斗南（トナミ）沼の義
18 男鹿半島（オク）頸首（えりくび）の義

此外、多々あるべけれども略す。

（完）

北海道地名解
定價 布裝九十錢 紙裝六十五錢

大正七年六月十日印刷
大正七年六月十五日發行

著作者 札幌區南一條西三丁目六番地 礒部精一
發行者 東京市小石川區久堅町百八番地 中村信以
印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地 川端勘一
印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地 博文館印刷所
發行所 札幌區南一條西三丁目六番地 富貴堂書房 振替小樽三一七番 電話二五七・五八五番
大賣捌 東京神田 東京堂書店（其他各地書店）

▽▽▽ 著作權所有 ▽▽▽

北海道廳製圖主任　小池國信先生校訂

要領北海道地圖

紙幅		
横	二尺六寸	
竪	一尺八寸	
定價		
袋入	金二十五錢	送料二錢
軸金巾仕立	金壹圓	送料八錢
軸緞子仕立	金一圓八十錢	送料八錢

本圖は體小なれども俊敏、山椒の如くセリ、として鋭く、氣の利きたる忠僕の如し、大小の一點一劃――細大の一線一色悉く從來地圖の舊套を破りて徹頭徹尾現代の氣分に接觸し新生面を開きたるもの一度び本圖を瞥見せば瀟洒たる新生氣の全圖面に躍動するを見ん。

發行所　札幌南一條　富貴堂書房
振貯小樽三一七番

376
159

終